

鈴木 明

その声は戦場に消えた



鈴木明

その声は戦場に消えた

著者略歴

昭和4年東京生れ。昭和30年より民間放送局に勤務。『『南京大虐殺』のまぼろし』で昭和48年に第4回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。著書に『『南京大虐殺』のまぼろし』『リリー・マルレーンを聴いたことがありますか』『誰も書かなかった台湾』『証言—中国・沖縄・台湾』『高砂族に捧げる』『誰も書かなかった毛沢東』等がある。

その声は戦場に消えた

定価 1000円

1978年8月15日第1刷

著者 鈴木 明

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3

電話 03—265—1211(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Akira Suzuki 1978

Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

I	オーファーズ・オブ・ザ・パシフィック！	5
II	ブリスベーンから贈られた毛筆のピラ	19
III	「上海放送局」の奇妙な戦い	75
IV	「声」は思想たり得るか	133
V	真珠湾奇襲は「ミステリー」なのか？	161
VI	“安全なジャップは死んだジャップだけさ”	179
VII	「第七の武器」を手にした人たち	227
VIII	ウソは小さいほど本当らしくみえる	257
IX	カーテン・コールのかけに	289

装帧
坂田政則
地图
高野橋康

その声は戦場に消えた

I オーフアンズ・オブ・ザ・パシフィック！

僕のメモ帳には、その日のことが「昭和五十二年三月十三日午後八時」と書かれている。厳密に言えば、この「時間」は、東京時間で三月十四日午後一時である。その時僕は、二週間ばかりのアメリカの旅を終え、明日はサンフランシスコ発東京行の日航機を待つ以外に、何の用事もない体であった。

夕食を終え、ツカハラさんという二世の方に連絡をとったが、電話がうまくつながらなかった。旅の終りだというのに、妙にイライラしていた。心の中に、ふっきれない沢山のものが、ヘドロのように澱んでいた。

その原因の大半が、三日ばかり前に会ったアイバ・トグリ女史にあったことは間違いない。いまはニュースの流れが早いから、多くの方の記憶から外れてしまったかも知れないが、「アイバ・トグリ」は「東京ローズ」として裁判を受けた例の「謀略放送事件」の主人公で、僕が訪ねてい

ったのは、彼女が二十九年ぶりにアメリカの市民権を回復し、そのことが日本でも話題になったからであった。僕も素直に「日本」の一つの傷が癒されたことを喜び、長きにわたった不当なるアメリカの処置に、僕なりの何らかのレポートを書くつもりでいた。しかし、彼女本人に会った数分後、僕のその気持は、あとかたもなく消えていた。

何故だろう、と、そのあと何日も、僕は考え続けた。たしかに、彼女自身が他人に好感を与えないキャラクターの持ち主だったことはある。僕は、かねて連絡をとっておいでくれたYと一緒にいったのだが、会った瞬間、「ダレ、コノヒト」と、彼女はYにいった。Yが「自分は連絡者であり、インタビュするのはこの人である」旨を辞を低くして弁明すると、「きいてなかったね、しばらく待って」と、もう一度無表情にいった。

彼女が帳簿と取り組んでいる三十分ばかりの間、僕は所在なしに、店の中をブラブラ歩き廻っていた。シカゴの一角にあるこの店は、いわば日本商品専門のスーパーで、僕も同じような店をロサンゼルスなどで見ているが、彼女の店は、僕が想像していたよりも、遙かに大きい店の構えだった。日本の本、週刊誌から——無論、数カ月前のものまでも含めて——日用雑貨、食品、また、すだれや燈籠に至るまで、「日本」の形をしたものは、何でも並べられていた。倉庫を改造したらしいこの店の二階には、バイオニアである父が、アメリカやカナダで如何に奮闘したかの記録が、沢山の額縁に収まっていた。

しかし、それらのものを見れば見るほど、何故か僕の気持は虚しく、そして冷えびえとしたものになっていった。正直いって、僕はその時のテープを再生しなければ、彼女とどんな会話を交

したかとも思い出せない。いま改めてきいてみると、彼女はあの「裁判」が如何にバカらしいものであったか、そして、彼女自身、全く何の罪もなかったのだ、ということ、独特のしわがれ声で語っている。その会話の内容に、特別僕を憂鬱にさせるものがあるとも思えない。しかし、このことだけは憶えている。僕はシカゴまで行きながら、この魅力的な街に一泊することもなく、逃げ去るようにその日のうちにサンフランシスコまで飛んでしまったのである。

この時僕は、格別に「東京ローズ」なる人物への先入観をもっていたわけではない。「ダレ、コノヒト」とのっけにいわれたことに特に不快な感じをもったわけでもない。彼女は戦争中に「謀略放送」という仕事に従事した興味あふれる人物であるし、ききたいことは山ほどあった。現にアメリカにいた時、偶然のことから、「東京ローズ」の声を、テレビで聞いたという体験すらある。

それはある人の家で、トイレに立った中途の出来事である。話をしていた隣の部屋には、テレビがついていた。ふと通りかかったその瞬間、テレビから艶めかしい女性の声で、

「ハロー！ オーフアンズ・オブ・ザ・パシフィック！（今日は！ 太平洋の孤児さんたち！）」

という声が聴えてきたのである。びっくりして立ちどまると、それは戦争中の南海の島と思われる米軍の休養所で、アメリカ兵たちがボーカーなどをしながら、遊んでいるシーンであった。ほんの一分たらずの間だが、僕は思わず足を止めて、その画面を見ていた。アメリカ兵が、この「東京ローズ」の声をサカナにして、何かしゃべっているらしい場面であることは、すぐ想像が

ついた。あとで聞いた話では、これはアメリカの三大ネットワークの一つであるABCから放送されている「オペレーション・ベチコート」という戦争コメディで、いわば他愛もない娯楽ものの一つであることがわかった。しかし、それが単純な「娯楽もの」であり「他愛もない」ものであるだけに、「東京ローズ」なる人物が、いまもなおアメリカ人社会の意識の中に厳然と生きていて、しかもそれが「他愛もない」ものであることが逆に僕を何ともやるせない心境に追いやっていた。

人間の感覚は、その後の体験によって増幅され、時には何でもないことが「神話」にまで高められることがある。「東京ローズ」の場合も、また本人に関係なしに作りあげられた「アメリカの神話」の一つであろう。しかしそのことと、現にその「神話」の主人公が生きているということとは、また別の問題である。僕はそのギャップが整理されないうちに、不用意に本人に会ってしまったのかも知れない。そして、自然のうちに自分の中に出来上ってしまった「東京ローズ」なる存在への予感と、現実にはシカゴのみすばらしい通りの中で「日本」を誇示しながら、しかも日本を否定するところから裁判をはじめなければならなかった彼女の實在とのギャップが、埋めきれなかったのかも知れない。

どちらにしても、サンフランシスコにいた三日間、僕は殆ど何もせず、ホテルの窓から澄んだ青空を見つめていた。何かを求めようとするいつもの張りつめた気持が、その時にまるでなかった。そして、十三日の午後八時頃、何げなくツカハラ氏に、もう一度電話をかけてみたのである。ツカハラ氏の名前は、何人かの日系の人を通じて、戦争中日本に「謀略宣伝放送」をやったと思

われる数少い生証人の一人として、僕のメモ帳に書き込まれていた。

十三日は、日曜日であった。ヨーロッパの習慣では、日曜日に仕事で電話をかけることは大変な失礼に当たるといふ。アメリカでも、日曜の夜はテレビを見て、早目にベッドに就くのが常識である。そのために、アメリカのテレビ局は「大勝負」を、視聴者が最もテレビの前にいる可能性の高い日曜の午後から夜にかけて行う。有名なテレビ映画「ルーツ」が、日曜の夜にはじまって日曜の夜に終わったことは、テレビ関係者なら誰もが憶えている。

「日曜八時の電話」は、かける方も気が重かった。しかし、電話口に出たツカハラ氏は「どうぞ、かまいません。おいでになって下さい」といった。二世らしい多少アメリカナイズされた日本語だが、この返事はいくらか僕の気を軽くしてくれた。アメリカの所番地は番号通りにゆけば簡単にわかるから、僕はすぐ電話を切った。しかし、これは失敗であった。アパートの番号は、意外に複雑でわからなかった。日本でも、深夜に団地の住所を訪ねるのは、多くの人が戸惑うに違いない。人通りもなく、たまにスレ違う人も「わからない」の一言だけだった。一時間近くもたつてホテルに舞い戻り、再び彼の許に電話をかけた時、僕はこの夜の訪問を、半ば諦めていた。

もしこの時電話に出たのが彼の奥さんでなかったら、そして、彼女が「それはお困りだったでしょうね。私が外に出て、立っていてさしあげますから、もう一度その道をおいでになって下さい」といつてくれなかったら、僕の「アメリカ人への興味」も、ことによると、この夜で終わってしまったかも知れない。彼女は、戦後第一回のアメリカ留学生として西部に渡り、そのままツカ

ハラ氏と結婚してしまった、いわば「本当の」日本人女性なのであった。

ツカハラ氏は、彼の「昭和十六年十二月七日」からはじまった。彼はこの年、つまり一九四一年三月にアメリカ市民としてアメリカ軍に徴集されていたから、太平洋戦争のはじまったその時は、自分の父の国である日本と戦わなければならない立場に立たされていた。僕が印象深かったのは、彼のその「立場」ではなく、彼がこのニュースをきいた時の最初の感想である。彼は、「意外だ、信じられない、と思った」

と語っていたのである。

考えてみれば、これはふしぎである。アメリカは、ツカハラ氏が入隊したその同じ三月に、ヨーロッパでドイツと戦っているイギリス軍に対して、「中立」を放棄し、積極的に武器援助をする方針に切りかえている。これは「中立」を長い間国の方針としてきたアメリカにとっては大変な大転換で、事実上、アメリカはヨーロッパ戦争に参加していることになる。

そしてその年の七月、日本軍が、当時フランスの植民地であったベトナムに進駐すると、イギリス、オランダは即時日本に経済断交を宣言し、日本の資産を凍結してしまう。アメリカが同じように日本に経済断交を通告し、アメリカ内における日本の全資産を凍結するのは八月一日である。そして、十一月二十六日には、いわゆる「アメリカの最終案」を日本に提示する。その案が、ベトナム、及び中国からの全面撤兵であったことは、いうまでもない。

当時の新聞をいま改めて読んでみると、朝・毎・読を問わず、日米の戦争はもう眼の前に迫っているような印象をうける。事実、「十二月八日」のことを五十五歳以上の日本人が語るとき、

よくも悪くも「来るべきものが来た」という感覚で受けとっている。言論と報道が日本とは比較にならないほど自由であったアメリカにいた日本人たちが、日米の開戦を「信じられないほど意外」と思うのは、どう考えてもおかしい。

しかし、実はこれを「意外」といったのは、ツカハラ氏だけではなかった。むしろ、大部分の二世の人たちは「意外」という言葉を使った。この時も、僕はこの言葉の持つ本当の意味がわからなかった。それが実際にはつきりするのは、次にワシントンに出かけた以後ということになる。ツカハラ氏が僕を興奮させたのは、彼が僕に見せた数百枚のピラであった。彼は対日戦がはじまると、情報部に廻され、対日戦の心理作戦部門を担当させられたのである。はじめ、彼は「対日放送」、つまり、東京ローズの逆の立場の役割を果たすはずであった。事実、少しの期間、その部門を担当した。しかし、上層部の方針と、彼の意見との間には、根本的な食い違いがあった。

当時対日放送部門を担当していた情報将校は、マニラにいるミステイザー——フィリピン人とスペイン人との混血で、フィリピン美人の典型といわれる——の一人を使って、日本向けの放送をやるうと思いついた。彼女は声も甘く、日本語も巧みで、「東京ローズ」の実績を評価していた米軍将校としては、いわば「粹な思いつき」であった。

しかし、ツカハラ軍曹は強くこの「思いつき」に反対した。日本軍の兵士に対しては、そんな「女の声」などは、逆効果こそあれ、何の意味もないと主張したのである。ツカハラ軍曹は、「東京ローズ」の声を面白がってきているアメリカ兵の姿に、いつも恥しい思いをしていた。彼はアメリカ市民ではあったが、そしてアメリカ市民としての義務には忠実であったが、同じように

日本も愛していた。彼の中にある「日本」は、「東京ローズ」のような放送をやらせる日本ではなかった。そして、「マニラ・ローズ」を仕立てることによって、日本軍の士気を弱めようとするアメリカ人の発想そのものが、我慢がでなかった。

この意見の衝突を機会に、彼は「放送」から「ピラ制作部門」に転属になったのである。彼は精魂をこめて、対日戦のピラ制作に取り組んだ。そして彼が更に他の担当者と違っていたのは、その青春を賭けて作りあげた自分の「作品」を、三十数年間、キチンと保存していたことであつた。

「伝単」という文字が、俗に使われている。話にはよくきくし、写真で見たこともある。しかし、実際の現物を、「新品同様」に何百枚も保存している人が僕の前に現れるとは、この時まで予想もしていなかった。

「珍しいでしょう」

興奮する僕を見ながら、彼は自分の愛児をなで廻すように、一枚一枚を説明しはじめた。

「日本人兵に告ぐ」

「停戦を希望する日本軍兵士諸君！」

「昨日の敵は今日の友」

など、いわば代表的ともいえる伝単に混って、日本の危機を訴えるイラスト風のものや、「友軍は来るだろうか?」「米国の精神は慈悲」というような心情に訴えたもの。「今日は天長節」という、天皇は本当のことを知らされていない、という政治的効果を狙ったもの。中には「台湾之



ツカハラ氏のグループが制作したビラの一枚

將來」という中国文のもの、「第十九師団の朝鮮人將兵諸君に告ぐ」というハングル文字のものなど、僕はまるで魔法の國にでもいる心境で次々に出される伝單に見入っていた。

「アメリカの方針は、日本軍に眞実を知ってもらう。そしてお互いに、無駄な命を落させたくない、この二点だったのです。日本人に、とにかく死んでもらいたくない、唯それだけの氣持から作ったのです。その意味では、この仕事をして、本当によかった、と今でも思っています。この形が、その基本ですね」

彼はその代表的な一枚をとり出した、青、赤の二色刷りで、表側に「I cease resistance」と大きく書いてあり、五行の英文がつけ足してある。その下段に日本文で、

「上の英文の内容は『この人は最早敵でなく、國際條約により生命、衣食は勿論、医療等が完全に保証さるべき者なり』と云ふ意味が書かれて居

る」

と、説明文が入っている。その裏面の文面はこうである。

「吾々米軍は、諸君の奮闘振りには、全く驚嘆してゐます。併し乍ら現在の戦争は、米軍の機械力と物量が圧倒的に勝利を得た様に、勇気だけでは絶対に勝てないと云ふ事を諸君は認めたでせう。

今や吾軍は海に陸に空に、絶対優勢であつて、日本軍の反抗は全く無意味となり、諸君の運命は風前の燈と云ふ状態であります。

或る前線では、日本軍将校が戦況が最後の段階に入り、全然勝味がなくなつてしまつたのに、無暴にも抵抗続行を命じ、部下兵士は疲労困憊、加ふるに武器弾薬及び糧秣等の補給も一切途絶え、飢餓に苦しみ、戦争どころか病氣や負傷の爲め、哀れにも死亡する者続出と云ふ全く情け無い有様となつてしまひました。併しその中にも相当数の兵士は、結局反抗を止めて吾軍の保護下に入り、米兵と同じ食事を支給され、傷病兵は亦米軍の病院で米軍兵士と同様、手厚い看護と治療を受けてゐます。

日本兵士諸君。よくこの辺の事を考へ、吾軍の保護下に来る様、決心しませんか。決心がつけば一日も早く武装を解いてこのピラを振りかざして米軍陣地に御出なさい。この一枚のピラを多勢と一緒に使用しても差支へありません。傷病兵を連れて来てもかまひません。充分手当をして上げます。現に吾々米軍の保護下にある諸君の多くの戦友は『昨日の敵は今日の友』と云ふ諺通り、吾が軍の手許で厚遇されてゐます」